

## 特別支援教室に求められる役割と機能

～柳町小学校における教材教具開発とマニュアル集の作成～

安部 博志\*・比嘉 展寿\*・間々田和彦\*\*・野村 勝彦\*\*

どの学校にも発達障害の子どもは存在する。したがって、すべての学校に彼らを支援するための特別支援教室が必要であることは明らかである。近い将来、全国の学校にとって特別支援教室を機能的に運営することが大きな課題となるだろう。そこで、本稿では特別支援教室の機能的な運営のための条件を明らかにするとともに、特別支援教室を想定した教材教具の開発とマニュアル集の作成について報告する。実践研究のフィールドは文京区立柳町小学校である。まず我々が取り組んだのが、日々の授業改善を目指した学校研究によって、教師が協働して課題解決にあたる力（学校力）を高めることである。出前授業や出前研修を通して授業づくりや教材教具の大切さを理解することが、特別支援教室運営の基盤づくりとして重要であった。さらに、教材教具の開発とマニュアル集の作成をとおして、特別支援教室に求められるのは、とくに社会性や自尊感情を高める教育プログラムであることがわかった。

キー・ワード：授業改善 学校力 チーム援助 自尊感情

### I はじめに

特別支援教育が本格的に実施されたのは、2007年度からである。これに先立つ2003年度から、筑波大学附属大塚特別支援学校では支援部を新たに立ち上げ、特別支援教育についての実践研究に取り組んできた。

支援部の研究テーマを振り返ると、この間の特別支援教育の辿ってきた軌跡が見えてくる。すなわち、以下の3つのステージである。

- ・特別支援教育のシステムの構築【第1ステージ】
- ・アセスメントやコンサルテーションの方法【第2ステージ】
- ・授業改善を通じた学校力の向上【第3ステージ】

さて、これまでの実践研究の軌跡を辿り、そこから将来の特別支援教育の在り方に目を凝らしたとき、つぎの2つのテーマが浮かび上がってくる。

それは、「インクルーシブな教育の実現」であり、「特別支援教室の機能的な運営」である。

前者は、特別支援教育の最終目標でもあり、これまでも並行して取り組まれてきた。単に制度上の課題ではなく、ひとつの思想であり、価値観や人間観までもが問われる課題である。したがって、今後も紆余曲折が予想される。

いっぽう、後者はすぐ目の前に差し迫った課題であり、研究成果の発信が急がれる。通級指導学級は、どこ

も定員満杯であり希望しても順番待ちの状態である。どの学校にも発達障害の子はいるわけであるから、本来ならすべての学校に受け皿がつけられるべきである。

東京都教育委員会は、平成28年度から都内のすべての小学校に順次、特別支援教室を設置することを表明した（東京都教育委員会、2010）。これに先立ち、文京区では平成23年度から区内公立小学校3校と中学校2校に特別支援教室を設置し、運営上の課題についての研究をスタートしている（文京区教育委員会、2011）。

こうした社会情勢を考えたとき、近い将来、全国のすべての小中学校にとって特別支援教室の運営が大きな課題となるはずである。

そこで、本稿では、特別支援教室を機能的に運営するための条件について明らかにするとともに、特別支援教室を想定した教材教具の開発とマニュアル集について紹介する。

実践のフィールドは、文京区立柳町小学校である。筆者らは、過去4年間にわたって柳町小学校の校内研究に協力してきた（安部、2010～2011）。同校には、文京区特別支援教育推進モデル校として2009年度から特別支援教室が設置されており、我々は、その運営にも携わってきた。

特別支援教室のイメージを、通常学級や特別支援学級との関連性から図式化したものをFig. 1に示す。特別

\*筑波大学附属大塚特別支援学校 \*\*筑波大学特別支援教育研究センター

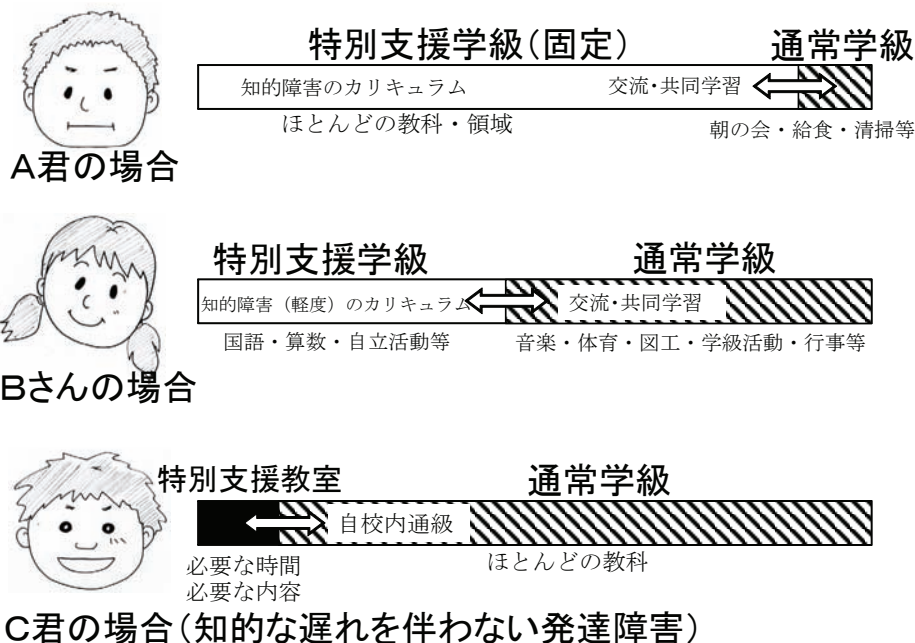


Fig. 1 特別支援教室のイメージ

支援教室とは、近い将来すべての小中学校に設置されるリソースルームであり、原則的には知的な遅れを伴わない発達障害の子どもを対象とする。支援のニーズに応じて、必要な時間、必要な内容について自校内通級をして学ぶことができる。

## II 特別支援教室の機能的な運営のための基盤づくり

場所を用意して担当者を配置しただけでは、特別支援教室は機能しない。対象とする子どもは通常学級に在籍しているわけであるから、通常学級の担任との綿密な連携の上に運営する必要がある。担当者任せにしたら、たちまち崩壊してしまうだろう。

以上のような考えから、教室の運営基盤をつくるために、柳町小学校に対して以下のようなアプローチを試みた。

### 1 授業改善をめざした学校研究

特別支援教育を推進するときに、最終的に問われるのは学校力である。つまり、教師が協働して課題解決にあたる力があるかどうか、そこが試されるのである。発達障害の子どもを、どのように支援するかというレベルの話ではない。

学校力を高める一番着実な方法は、教師が互いに知恵を出し合って日々の授業改善を追究することである。そのためには、これまでの伝統的な学校研究のスタイルを変革する必要がある。

発表のために周到に準備された特別な授業の検討ではなく、日々の授業の改善をめざしたい。批判に曝され意欲を削がれるような授業検討会ではなく、同僚性が紡ぎ出されるものにしたい。研究から得られた知見を全教師で共有し、やってよかったと思えるような意味のある学校研究をしたい。これが、柳町小学校の教師と確認した研究の方向性である。

そこで、大塚特別支援学校で行ってきたビデオ分析による授業改善の方法を提案した。

まず、全教師が夏休みまでに普段の授業をビデオに撮る。これを、改善前の授業 (before) とする。夏休みから秋にかけて、このビデオを観ながら改善点について話し合う。そこから得られた知見は、「授業評価項目表」として全教員で共通理解を図る。こうしたプロセスを経て改善された授業 (after) をビデオに撮り、相方を比較検討するという方法である。

授業改善の話し合いでは、授業を客観的に記録するためのシート (Fig. 2) (安部, 2006) を活用した。また、授業を公開した教師が批判に曝されるのを防ぐためにグラドルールをつくった。つぎの4点である。

- ・授業の良し悪し、指導の上手下手を批判しない
- ・授業の事実からものを言う (教育観を戦わせない)
- ・授業の中でよかった点、自分が勉強になった点を伝える

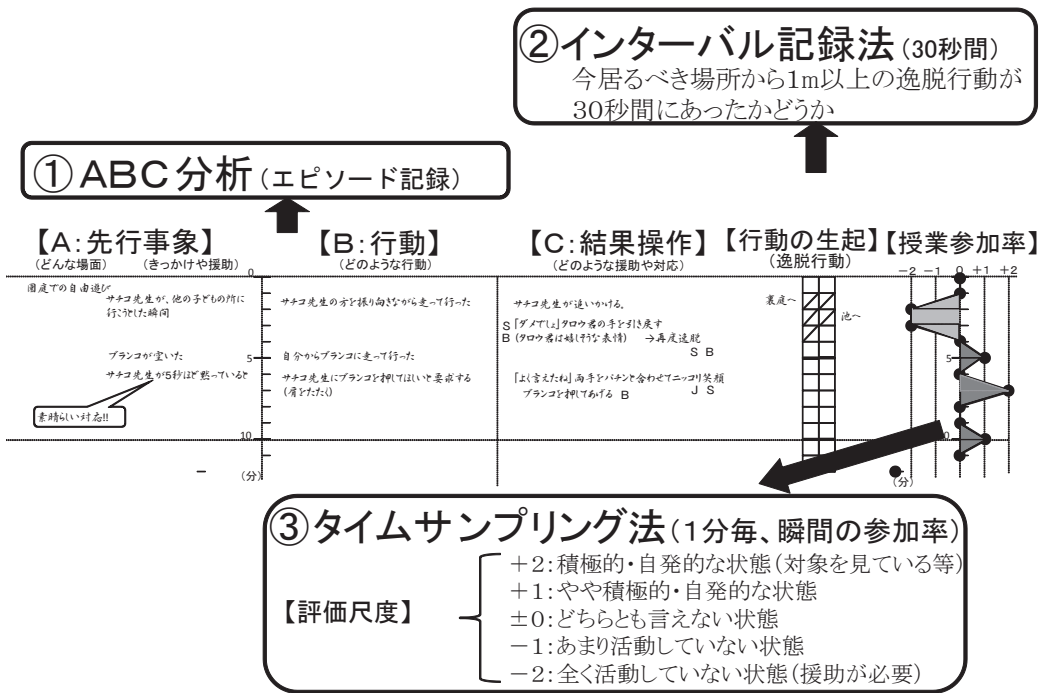


Fig. 2 授業分析のためのシート (サンプル)

・授業者に対する礼儀として必ずひとり一回は発言する

授業研究会では、観点ごとにカテゴリー分けされた模造紙が用意される。ビデオを観ながら付箋紙に記入し、それぞれの模造紙に貼っていく。これを眺めながら立ってディスカッションするのである。

お茶を片手にリラックスした雰囲気の中での発言は、どれも謙虚で温かい。学校という場所は、とかく声の大きな人が優位に立つ傾向がある。付箋紙を活用したことによって小さな声も尊重される。話し合いをスムーズに進める上で、ファシリテーションの技法が役に立つ。

柳町小学校では、このようなディスカッションを通して、各教師の学級経営や授業の改善点が浮き彫りになった。また、子どもを捉える観点が拡がり児童理解が深まった。その結果、支援を要する児童の対応について共通理解が図られた。さらに、ベテラン教師が職人技を披露し若手がそれに触発された。こうして、教師が協働して課題解決にあたる力(学校力)が醸成されることになった。

## 2 モデルとしての出前授業

基盤づくりのもう一つは、モデルとしての出前授業である。発達障害の子どもに配慮した授業は、すべての子どもにとって分かりやすく達成感のある授業である。つまり、授業のユニバーサルデザインである。このこと

を、柳町小学校の教師達に気づいてほしいと願って企画した。

Fig. 3は、柳町小学校の通常学級5年生35人に対する、理科「宇宙と天体」の出前授業である。授業を参観した柳町小学校の教師からは、次のような感想が寄せられた。

「いつもは落ち着いて話を聞いていられない子が、熱心に授業に参加している姿に驚いた」「教材のもつ力が子どもたちを惹きつけていたのを強く感じた」「子どもたちが、思わずやってみたくなる活動を設定することが、授業にとっていかに大切なことかを学ぶことができた」



Fig. 3 宇宙と天体についての出前授業 (間々田)

### 3 有効な教材についての出前研修

Fig. 4 は、特別支援教室を想定した教材についての出前研修である。スーツケース3個分の教材を運び込み、一つひとつ扱い方を説明しているところである。

これまでの学校コンサルテーションの中で、うまくいった支援策には、ふたつの共通点がある。ひとつは、ほんのちょっとした工夫でできる支援策である。教師は忙しい。大変な労力を要する支援策はとても続かない。もうひとつは、特定の子どもばかりでなくクラス全員にとってメリットがある支援策である。

私たちの教材をヒントとして、柳町小学校の教師たちにオリジナルの教材を開発してもらうのがねらいであった。受け身の姿勢ではなく、自分たちも特別支援教室の運営に積極的に携わってほしいという願いがあった。

この研修によってハートに火を点けられた教師のうち何人かは、自分で工夫してオリジナル教材を開発してクラスで試すようになった。こうして増えた教材を、どのように共有して活用するかについて、知恵を出し合ってきた。



Fig. 4 教材についての出前研修

### Ⅲ 教材開発とマニュアル集の作成

どの学校にも発達障害の子どもはいる。だから、すべての学校にリソースとしての特別支援教室が必要なことは誰の目にも明らかである。だが、なかなか前に進まない。

「お金がない」「人手や場所がない」「忙しい」どれも事実であろう。しかし、いつの時代も、法律や制度が整うのは最後である。ましてや、大震災後のこのご時世である。全国 34,000 の公立小中学校に、特別支援教育の専門性をもったプラスワンの担当者を配置するのは現実

的には難しいかもしれない。

ところで、支援を必要とする子どもたちにとっては、「今」が重要である。我々は、システムや制度が整うのをただ指をくわえて待っているわけにはいかない。目の前では、支援を必要とする子どもたちが悲鳴をあげている。ならば、今できることから着手するしかない。

柳町小学校では、教材を整備して有効活用できるように工夫してきた。たとえば、教材として作ったプリントは、次の担任も活用できるように原本を残すルールをつくった。教師が異動先に教材をもっていってしまうのではなく、学校の財産として蓄積しようとする試みである。当たり前の話だが、実践している学校は少ない。

そこで思いついたのが、それぞれの教師がこれまでの教育実践の中で蓄積してきた教材や支援方法を特別支援教室に集約し、そのマニュアル集を作成することである。目の前に具体的な教材とマニュアル集さえあれば、発達障害に関する専門的な知識があまりない教師でも、特別支援教室の運営に参画することができる。これならば、今いるスタッフで何とか教室運営をやり繰りできる。

ただ、やみくもに教材を並べたのでは使いにくい。そこで、分類のための10のカテゴリーを提案した。

- ① 物理的環境と言語環境を整える
- ② 見えないものを可視化する
- ③ 課題解決のための手がかりを分かりやすく示す
- ④ 学習機会を増やし授業への参加率を上げる
- ⑤ 教材教具を工夫して成功体験に結びつける
- ⑥ 行動の背景にある要因を分析して先手を打つ
- ⑦ 感情や行動をコントロールする方法を学ばせる
- ⑧ 学び合いの学習から互いの多様性と善さに気づかせる
- ⑨ 社会性や自尊感情を高める
- ⑩ その他

Fig. 5 は、教材の扱い方マニュアルのサンプルである。この様式に沿って、柳町小学校の教師たちから教材を募集した。長期休業の前には、柳町小学校の研究部長が1人3点を宿題として課した。

こうして特別支援教室に集約された教材や支援のノウハウは、借り物ではなく柳町小学校の教師たちの財産である。この財産を、さらに増やし、人が代わっても引き継がれるシステムにしていきたい。

このように、特別支援教室を機能的に運営するためには、学校が組織として自立することが必要不可欠であ

## 教材の扱い方

◆教材名とカテゴリ番号  
『リフレーミング・カード』 ⑨社会性や自尊感情を高める

◆支援のねらい  
①視点を変えて物事を眺めると、これまでと違った多様な見方ができることを知る。  
②他者のマイナス部分をリフレーミングしてみることによって、これまで気づけなかった友だちや周囲の人のプラス部分にも目を向けることができる。  
③自分のマイナス部分をリフレーミングしてみることによって、気持ちがほっとして元気になる。

◆対象とする子ども  
自尊感情の低い子、友だちに対して寛容さに欠ける子、何となくいつも元気の無い子、人間関係を改善したいクラス、など

◆指導の方法や留意点

あと、ち分 しれない	こだわる	変わって いる
だらしな い	空気が読 めない……	気が強い 消極的
親子に のりやう い	ぐっ、カッ と なってしまう	わがまま

表 裏

だいたいよぶ。 まだ、ち分もあるよ。 さあ、私も書いて やってみようね！	あなたは、自分の事をも らしかっていい人なんだよ。 だよ！だから、誰かに話 して聞いてみるの。 授業は、友達や先生 と一緒にやるからね。	あなたは、他の人には ない個性を持っている 人なんだよ！ 個性のない人なんて、 つまらないよ！
あなたは、小さなこ とを、あまり気にし ないのにおおらかな 人なんだよ。	あなたは、自分らしく、 まっすぐに生きていく人 なんだよ。 堂々として、強めるはず がないよ。	あなたは、自分の個性 の人なんだよ！みんなと 違う人なんだよ。でも、 個性があるの。
あなたは、周りの言 語態度を明るくしてく れる人なんだよ。 それがいいのよ。	あなたは、感情が豊か で情熱的な人なんだよ。 授業は、友達と一緒に やるからね。	あなたは、自分の考え を主張できる人なんだ よ。 とても、かっこいいよ。

●リフレーミング前のマイナスの言葉の裏側に、リフレーミング後のプラスの言葉を書いておく。裏側の背景は、元気になるようにビタミカラーにしておくとう効果的だろう。  
●普段、何気なく裏返せるように、学級や「特別支援教室」にウォールポケットで掲示しておく。  
●よく観察していると、自分が一番気がかりなカードを裏返す傾向がある。見逃さないようにしたい。SOSをキャッチしてカウンセリングの糸口をつかめる可能性がある。  
●リフレーミングとは、考え方の枠組みを変えて物事を見つめることであって正解はない。したがって、子どもたちに自由にリフレーミングする機会を設けたい。クラスでプリントを配布して書かせることもできるだろう。帰りの会で、子どもたちの言葉を拾ってカードにすることもできるだろう。同じ言葉でも異なるリフレーミングが出た場合には、どれも尊重してあげたい。  
●オリジナルのリフレーミング・カードが貯まってきたら、小グループでの「リフレーミングかるた大会」ができる。最初は裏側（リフレーミング後）のカードを読んで、表（リフレーミング前）のカードを拾う。慣れてきたら逆を試してみても面白いだろう。  
●最初から完璧なものを作ろうとせず、子どもと一緒に考えながら作るというスタンスがいいかもしれない。教師もゆとりをもって、リラックスした雰囲気の中で取り組ませたい。  
●保護者用・教師用など、子ども以外に対象を広げていきたい。

【参考文献】『構成的グループエンカウンター事典』国分康孝他。図書文化  
(資料作成：安部博志)

Fig. 5 教材のマニュアル（サンプル）

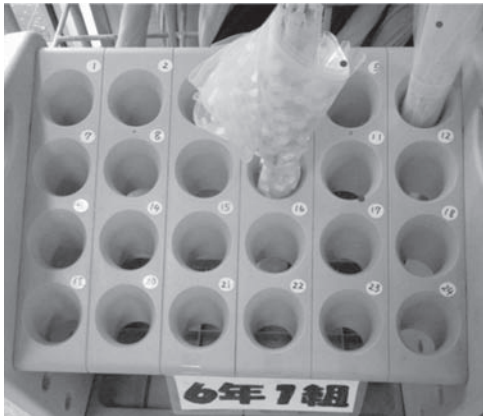


Fig. 6 傘立て

る。

以下、開発された教材等の一部を示す。

### ① 物理的環境と言語環境を整える

Fig. 6 は、出席番号が付けられた傘立てである。この傘立てにしてから、子ども達はきちんと傘を持ち帰るようになった。傘の間違えも減少した。不思議なことに、どの子も傘をきちんと畳んでフックで留めるようになったという。

Fig. 7 は、クラスの言語環境を整えるための教材である。子どもの目の触れないようにしておき、ここぞという時に毅然とした態度で提示する。普段は、お互いを温かく優しい気持ちにしてくれる「ふわふわ言葉」を生活の中から拾って掲示しておくようにする。

### ② 見えないものを可視化する

Fig. 8 は、石鹸で手をきれいに洗えるようにするための教材である。蛍光クリームとブラックライトを活用して、汚れている部分を目で見えるようにしている。

Fig. 9 は、授業のめあてとスケジュールを示したものである。柳町小学校では、どのクラスでも授業のめあてを短冊黒板で示すルールになっている。だから、どのクラスの授業も分かりやすく、子ども達は見通しをもって学習している。



Fig. 8 蛍光クリームとブラックライト

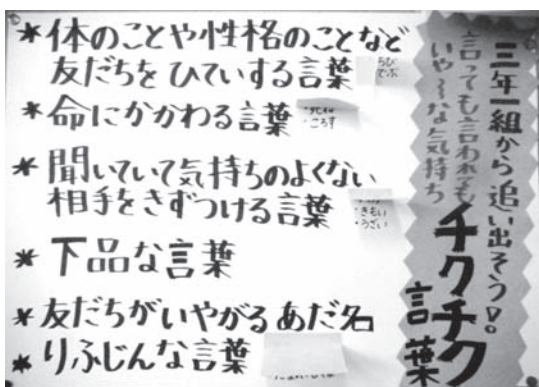


Fig. 7 言ってはならない言葉

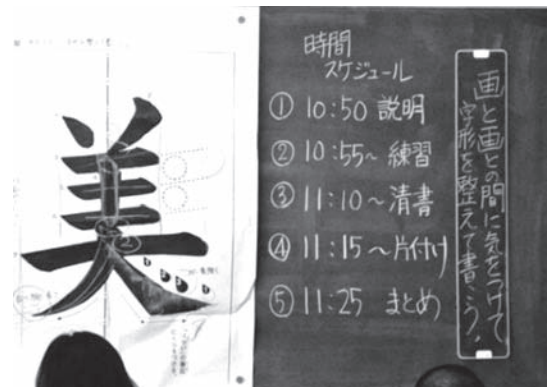


Fig. 9 授業のめあて

③ 課題解決のための手がかりを分かりやすく示す

Fig.10 は、係の仕事内容を課題分析して分かりやすく示したものである。4の所にある赤いマグネットは、今やっているところを示している。子ども達には、自分で見て判断して行動させる習慣をつけて、主体性と意欲を身に付けたい。

Fig.11 は、千個の積木（3cm立方体）である。数概念や分量を、目で見えて触って確認することができる。そればかりではない。気持ちが落ち着かなくなると、特別支援教室にやってきて、教師と一緒に積木を重ねる子がいた。どうやらヒノキには、気持ちを落ち着かせるアロマ効果がありそうだ。

⑤ 教材教具を工夫して成功体験に結びつける

教師が話している内容をメモしたり、板書をノートに

写したりすることが極端に苦手な子どもがいる。Fig.12 は、オリジナルの日課帳である。明日の時間割、宿題、持ち物、連絡と分かりやすくカテゴリー分けされている。下には「先生に伝えたいこと」「先生からのメッセージ」の欄があり、毎日のコミュニケーションのツールにもなっている。

⑦ 感情や行動をコントロールする方法を学ばせる

Fig.13 は、イライラが募って爆発する前に回避するためのお助けカードである。これによって、ストレスな

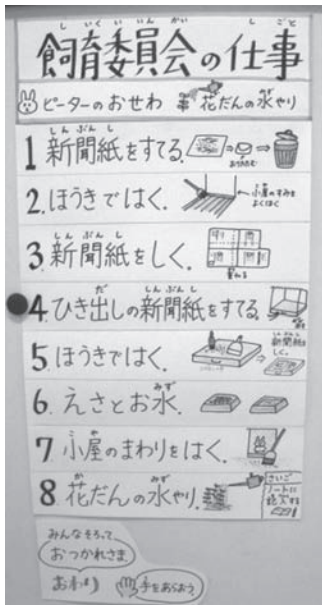


Fig.10 遂行の手がかり

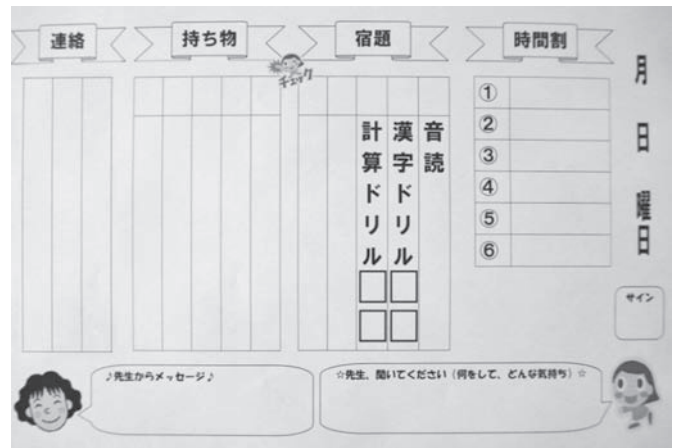


Fig.12 スラスラ日課帳

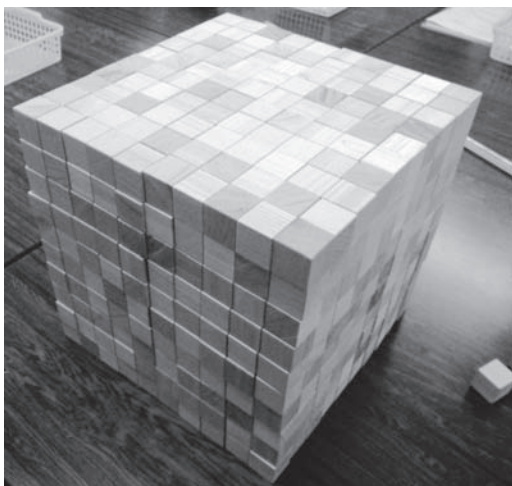


Fig.11 千個の積木



Fig.13 許可を求めるカード



Fig.14 いろんな感情

く教師の許可を得ることができる。

Fig.14は、自分の中には様々な感情が存在することを理解し、気持ちのセルフコントロールに導くための教材である。上はプラスの感情でオレンジ色に、また、下はマイナスの感情で青色によって示されている。それぞれの顔の表情と感情を表す言葉のカードを対応させたりする。

「嘘なんてついていないのに、友だちから嘘つきと言われたとき、あなたはどんな気持ちですか？」など、具体的な日常生活場面を想起させるようにする。

不安や怒りなどは、誰にでもある自然な感情である。しかし、それを人に直接ぶつけてしまったら相手を傷つけてしまう。かといって、我慢ばかりしていると今度はストレスで自分が辛くなる。大切なことは、マイナスの感情を自分でうまくやり過ごすことである。つぎの段階として、アサーションの学習につなげたい。

ただし、自尊感情が極度に低下してしまった子にとっては配慮を要する。そもそも、彼に行動のセルフコントロールを求める前に、まずは彼の心の中の空洞を埋める作業の方が先だからである。つまり、意図的に成功体験に導いて称賛される機会をつくることである。

自尊感情が高まらなければ、他者感情は高まらない。「私もOK！あなたもOK？」という心の在り様は、幸せの方程式であり教育が最終的に目指すところでもある。

#### ⑧ 学び合いの学習から互いの多様性と善さに気づかせる

Fig.15は、特別支援学級に在籍するA君が、通常学級で給食の準備をしているところである。柳町小学校では、学び合いの学習を目指して交流及び共同学習も積極的に推進している。特別支援学級に在籍している児童で



Fig.15 交流及び共同学習

あろうと、「やるべきことはやらせる」がモットーである。将来の自立にとって、過剰な援助はマイナスに作用するからである。

Fig.16は、一人ひとりが持つ「マイ黒板」である。教師が一方向的に知識を教え込むような授業を脱却して、子ども達が学び合う授業を実現したい。その中から、互いの多様性と善さに気づかせたい。マイ黒板は、そのためのツールである。

#### ⑨ 社会性や自尊感情を高める

Fig.17は、小学校1年生の「生活」の教材である。友だちのいいところを見つけて、それを記入した花びらをプレゼントし合うという学習活動である。自分では気づいていない自分のいいところを発見することができるかもしれない。

Fig.18は、傾聴と自己開示のゲームである。アンゲーム (ungame) と呼ばれる市販品もあるが、アメリカ文化を反映しているために日本の子ども達にはそぐわないところがある。子どもの顔と生活スタイルを思い浮かべながら教師がオリジナルの教材をつくりたい。その際、できるだけ子ども達のプラスの感情を引き出せるような質問項目を考えたい。

対人関係の緊張が高い子どもの場合には、まず教師と1対1のレポートを形成する。慣れてきたら、3～4人の小集団で行う。カードは裏返して真ん中に置く。一人ずつ順番にカードを引き、書かれている質問に答える。友だちが話しているときには、ひたすら聴くというルールを徹底する。聴いてもらえる安心感があるから、自己の内面を語るができる。

ただし、どうしても答えたくない場合には「パスカード」を出して無理に答えなくてもよいルールにする。質

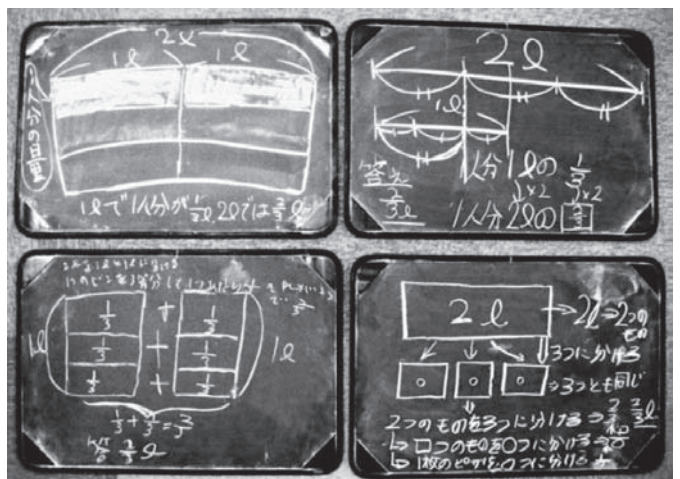


Fig.16 マイ黒板

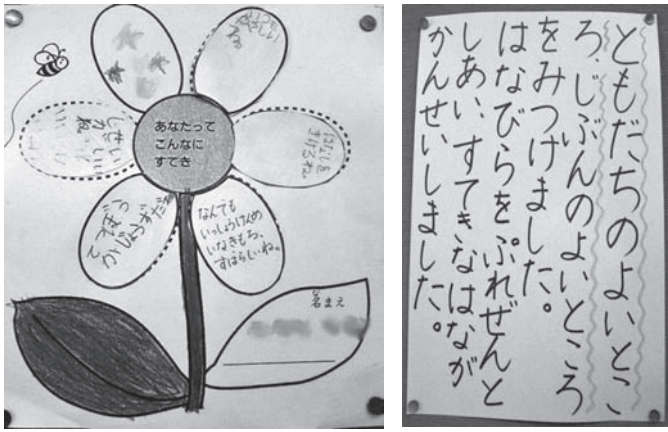


Fig.17 友だちの良いところ



Fig.19 ある心象風景

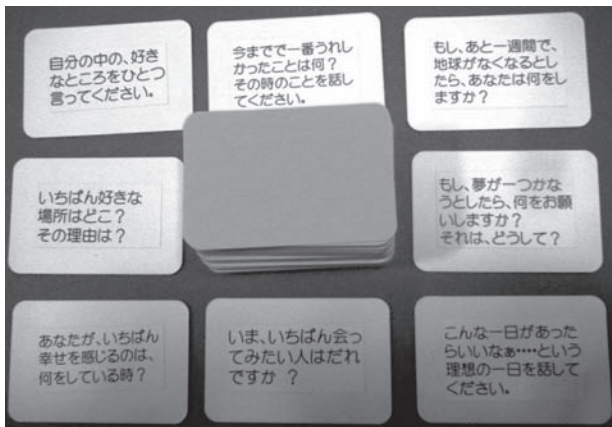


Fig.18 傾聴と自己開示のためのゲーム

問内容によっては、子どもの琴線に触れる恐れもある。過去のトラウマが蘇って、かえって混乱させてしまうこともあり得る。ただし、安易な逃避を許さないためにも、パスカードを出せるのは2枚までというような制限を設けたい。

何度か繰り返しているうちに、前に引いたのと同じカードが出る場合もある。そのときには、以前に話した内容とは異なる話をするというルールにしておく。こうすることによって飽きない。話の内容も深化し、コミュニケーションのレパトリーも広がる。つまり、社会性が高まることにつながる。

この学習のポイントは、リラックスした雰囲気をつくることである。そのためには、教師は恥を捨てユーモアを交えて自己開示のモデルを示すのが効果的である。

現代の子ども達は、お互いのことをあまり知らない。だから人間関係がぎくしゃくとする。他者理解が深まることによって、人間関係は確実に好転する。

また、自己の内面を語り、それが無条件で受け容れたとき、他者への信頼感と自分はこのままでもいいという安心感が生まれる。

#### IV 特別支援教室に求められるもの

日本の子どもの自尊感情は、諸外国に較べて極端に低いという研究報告がある（古莊, 2009）。数多くの現場を見てきて、確かにうなずける部分が多い。しかも、障害の有無にかかわらず、すべての子どもにとって言えることではあるまいか。

これまで支援してきたケースの中に、支援が極めて困難だった一群の子ども達が存在する。いつまで経っても終結には至らず、将来にわたっても苦戦が予想される子ども達である。彼らに共通するのが、自尊感情が極度に低下しているという点である。

「僕なんか、生きていても何も価値のない人間です」高校3年で、はじめてアスペルガー障害と診断された青年の言葉である。Fig.19は、彼の描いた絵である。

およそ人間にとって、自分はこの世に不要だという気持ちに囚われることほど悲しいことはない。これ以上の不幸はない。

彼に対して、いったい何ができるのか。また、将来、彼のようになりそうな目の前の数多くの子ども達に対して、今できることは何か。これが、我々が抱えている大きな課題である。

Ⅲで示した支援のポイント（10のカテゴリー）は、この課題に対する具体的な知見の一部である。カテゴリーの①から⑧までは、子ども達を成功体験へと導いてポジティブな言葉のシャワーを浴びせてあげるための支援と教材である。これらは、通常学級の中でも取り組める内容である。

近い将来、全国すべての小中学校に設置されるはずの特別支援教室では、カテゴリーの⑨、つまり、子ども達



の社会性や自尊感情を育むための教育プログラムが求められるだろう。

私たちは、自らの社会性や自尊感情を高めることによって、人との豊かな関わりの中で自己の存在価値を認識しながら生きていくことが可能となる。

特別支援教室の役割と機能とは、子ども達を幸せな人生に導くための処方箋と具体的な支援を提供することではないかと考える。その意味で、特別支援教室は、学校におけるオアシスのような場所にしたいものである。決して学習を補完するだけの魅力のない場所にしてはならない。

また、特別支援教室の役割と機能を考えることは、子どものうつ病や引きこもりの増加、学級崩壊など、今日的な教育課題に対処する上での数多くの示唆を我々に与えてくれることだろう。

## 参考文献

- 安部博志（2010）発達障害の子どもの指導で悩む先生へのメッセージ～結び廻る：つながっていきましょう！. 明治図書.
- 安部博志（2010～2011）授業改善から『学校力』向上へのコラボレーション～文京区立柳町小学校&筑波大学附属大塚特別支援学校～. 実践障害児教育 Vol. 448～453. 学研教育出版.
- 安部博志（2011）筑波大学附属大塚特別支援学校研究紀要第55集.
- 瀬戸口裕二・安部博志・北村博幸・安川直史（2006）子どもと家族を支える特別支援教育へのナビゲーション. 明治図書.
- 東京都教育委員会（2010）東京都特別支援教育推進計画（第3次実施計画）.
- 古荘純一（2009）日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか. 光文社.
- 文京区教育委員会（2011）文京区特別支援教育推進モデル校実施要項.